

北川民次の絵画技法（2）

— 名古屋市美術館所蔵作品の自然科学的調査 —

Painting Technique of Tamiji Kitagawa

— Technical Studies using scientific methods on his works
in collection of Nagoya City Museum of Fine Arts —

白河宗利・歌田眞介・森田恒之・木島隆康・森田義之・
増田直人・山田 諭・田中元偉・鈴鴨富士子・杉原朱美

SHIRAKAWA Noriyori, UTADA Shinsuke, MORITA Tsuneyuki, KIJIMA Takayasu,
MORITA Yoshiyuki, MASUDA Naondo, YAMADA Satoshi, TANAKA Motoi,
SUZUKAMO Fujiko and SUGIHARA Akemi

Main purpose of our work is to reveal principles of systematic painting process of Tamiji Kitagawa(1894-1989) using scientific methods. The artist spent his days in Mexico between 1921 and 1936, and they say that he applied a special self-made preparation layer of emulsion type to paint on it. Then authors did technical studies on some of his main works to reveal technical secrets of the artist. Two works from the collection of Nagoya City Museum of Fine Arts were selected after the survey on those from Kamiya Collection in last year. The first is "A Mine near from Taxco" (1934), work of his Mexican period, and the studied is "Writing Girl" (1939), which was made 3 years after his return. Photo taking, microscope observation, X-Ray fluorescence analysis (non-sampling method) and other optical investigations were made to discover his painting technique in emulsion paint

キーワード：エマルジョン下地 (Preparation of Emulsion Type)、赤外線写真 (IR Photo)、紫外線写真 (UV Photo) 蛍光X線分析 (X-Ray-Fluorescence Analysis)、顕微鏡写真 (Micro Photo)、絵画の技法解析 (Technical-Studies of Painting)、北川民治のメキシコ時代 (Tamiji Kitagawa in his Mexican days)

【研究の要旨】

本稿は、本学の研究補助金である理事長特別研究費「半田市かみや美術館所蔵の北川民次作品の保存科学的調査 一法則性を持つ絵画技法の解明一」（平成 21 年度）と科学研究補助金（基盤研究（B））「法則性を持つ絵画技法の解明 一昭和前期北川民次作品の自然科学的調査を通して一」（課題番号：22320040）（平成 22-24 年度）の第 2 回目の中間報告である。

本研究の主たる目的は、1930～1940 年代の北川民次の作品に自然科学的手法を応用して調査研究し、技法材料、保存修復、美術史の観点から学際的に解明することにある。とりわけ、これまで日本国内ではほとんど研究されてこなかったテンペラ画などで使用するエマルジョン（分散液）を媒材として用いた技法で描かれた北川民次の作品を研究対象とする。

本研究では、近年次第に再認識されるようになった法則性をもつ絵画技法の先駆例として、北川民次のメキシコ滞在期の作品の技法と材料を、自然科学的調査を通して解明し、再現研究を行う。あわせて、その歴史的背景を明らかにする。

【本研究の学術的背景】と【本研究によって明らかにされる内容】については、北川民次の絵画技法 一メキシコ滞在期作品の自然科学的調査一『愛知県立芸術大学紀要 40 号』にて報告

【これまでの研究経過】

本研究の研究グループは、財団法人かみや美術館（愛知県半田市）と名古屋市美術館（愛知県名古屋市）において計 5 回の調査を行ってきた。かみや美術館での調査は、2008 年 7 月に同館が所蔵する北川民次のメキシコ滞在期の 3 点の作品 一《カンディダ（無垢の女）》（1935 年）、《女の像》（1935 年）、《メキシコ・悲しき日》（1936 年～1937 年）一 の目視による観察調査を行った。2009 年 11 月の調査では、5 点の作品 一《カンディダ（無垢の女）》（1935 年）、《女の像》（1935 年）、《メキシコ・悲しき日》（1936 年～1937 年）、《聖書を読む少年》（1934 年）、《メキシコの月》（1934 年）一 について 4×5 インチカメラによる高精度撮影、側光写真、紫外光、赤外光等撮影と携帯型蛍光 X 線装置による分析等を行った。2010 年 9 月の調査では、デジタルマイクロスコープ撮影と携帯型蛍光 X 線装置による分析を行った。作品の一部に経年劣化に伴う損傷があり、額装を外せない作品（《聖書を読む少年》（1934 年））以外は、上記の撮影記録と携帯型蛍光 X 線装置による絵画材料の成分分析が実施された。

名古屋市美術館（愛知県名古屋市）の調査では、2009 年 3 月に 3 点の作品 一《タスコの山》（1934 年）、《作文を書く少女》（1939 年）、《老人》（1932 年）一 について 4×5 インチ・デジタルカメラによる高精度撮影、側光写真、紫外光、赤外光等による写真記録を作成し、携帯型蛍光 X 線装置により、使用された絵画材料の成分分析を行った。また、2011 年 10 月の調査では、上記 3 点の作品のデジタルマイクロスコープ撮影を行なった。

本稿は、北川民次がメキシコ滞在期に制作した作品 — 《作文を書く少女》（1939年）、《タスコの山》（1934年）（名古屋市美術館所蔵）についての調査報告である。

<調査方法>

■4×5インチ・デジタルカメラによる撮影

4×5インチカメラで全図および部分の精細撮影を行う。また、画面裏の撮影も行い、支持体の素材や状態を撮影する。撮影時に裏面に描かれた絵が発見されたり、画布に描かれた作品では、裏面の絵具の染み出しなどから描画材を推察することができる。

■デジタルマイクロスコープによる観察

デジタルマイクロスコープとは、CCDカメラに高倍率レンズを取り付け、PCに接続して調査範囲の拡大画像を観察する機器である。また同時に、調査範囲の長さ・面積などの計測が可能である。通常の光学顕微鏡との違いは、ハンディ操作や鏡筒部分を三脚などに設置して様々な角度・箇所からの観察が可能であること、さらに、ロータリーヘッドを装着すると360度回転するミラーを介して動画による立体形状の観察ができることである。調査現場で複数人が同時に観察しながら討議できるなど、利便性は高い。

■側光写真

画面のほぼ真横から一方向の光線をあてて撮影する。側光線を当てると、表面のわずかな凸凹が強調され、絵具層の亀裂や浮き上がり、支持体の変形と言った作品の損傷状態が明らかになるほか、画家の残した筆触や盛り上げなどが詳細に観察できる。さらに、画面とは無関係な筆跡が観察されることから、下層に描かれた別の絵が発見されたり、部分的な描き直しを推定することができる。

■紫外線蛍光写真

紫外線は、通常人間の目に見える光（可視光線）よりも短い波長を持っている。エネルギーが比較的大きく、物にわずかでも当たると反射するため、油画においてはごく表面の状態だけが観察できる。紫外線は目に見えないが、紫外線が物質に当たると、物質が蛍光を発し、これは人間の目で知覚できる。このような性質を利用して、表層のワニス層の状態を観察したり、暗く見える後世の加筆部分を見分けたりする。今回の撮影に際しては、ブラックライトと紫外線撮影用フィルターを使って撮影した。

■赤外線写真

赤外線は、通常人間の目に見える光（可視光線）よりも長い波長を持ち、物質の内部に達し反射

する。このため、赤外線写真では、油絵具の層を透過して下層にある下素描の線などを観察することが出来る。ただし、絵具層が厚塗りであったり、赤外線をよく吸収する黒色（炭素を含む）以外の色で下素描が行われている場合は判別が難しいことがある。今回の撮影に際しては、タングステン光と 3 種類の赤外線撮影用フィルター（透過域：～760、～800、～920 (nm)）を使って撮影した。

■携帯型蛍光X線装置による分析

物質にX線を照射すると、そこに含まれる元素に応じて特定の波長をもつ 2 次X線が発生する。この 2 次X線が蛍光X線であり、このX線を分析することで物質に含まれる元素の定性や定量を行う。携帯型蛍光X線装置は、調査現場に持ち込み大型の文化財でも任意の箇所を分析することができる。このことは、試料室と一体型のX線装置に比べて空気中の物質の影響を受ける要因となるが、試料との間隔をできるかぎり近づけて照射することと PC によるデータ処理によって影響を最小限に留めることが可能となる。このような方法は、非破壊で試料を分析できるため、文化財の調査に広く利用されている。



北川民次 作 《作文を書く少女》（1939年） 73.4×60.7 cm

【作品概要】

1936年、22年振りに日本に帰国した北川民次は、急速に戦時体制に傾斜していく日本社会の状況に戸惑いながら、二科会の会員として、ユーモアの衣に包んだ反戦的な絵画の制作を続けていた。

この作品は、当初《慰問文を書く少女》と題されていたが、当時すでに日中戦争が泥沼化するなかで、中国大陸の奥深くまで侵攻していた日本軍の兵隊へ向けて、国民学校の指導により子どもたちに「慰問文」を書かせていた事実を画題にしている。

ピンクの机に座って、鳥籠の十姉妹や白い花瓶の花々、二つの林檎に囲まれながら、原稿用紙を前に何を書けばいいのか困惑している少女(モデルは娘)のあどけない姿を愛情たっぷりに描いて、幼い子どもたちを否応なく戦争に巻き込んでいく状況を批判している。

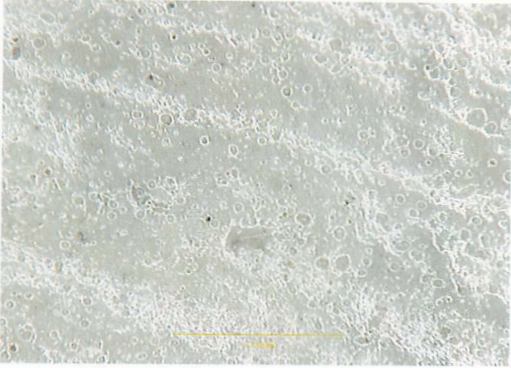
■ デジタルマイクロスコープによる観察



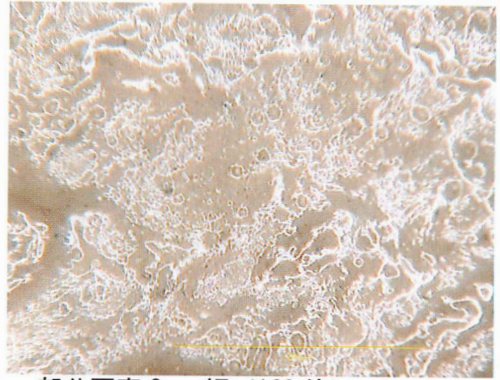
観察部分	
1	ノート
2	頬
3	机
4	机
5	林檎
6	キャンバス角擦り傷

【所見】

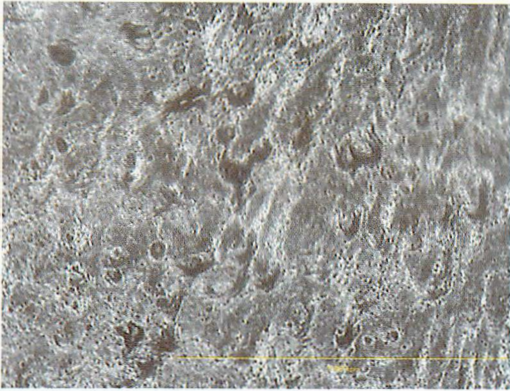
ノートの白色部分は、下層に目視の観察によっても判別できる青みのある下塗りによっても判別できる青みのある下塗り認められた。画面上には多くの気泡のほか顔料が油によつてのケン化して透明度が上がった状態が判別できた(部分写真1)。頬部分のピンクの絵具層はきわめて薄く、赤褐色(肌色)の下塗りがある(部分写真2)。机部分には無数のごく小さい表面亀裂が見てとれた(部分写真3、4)。林檎部分の観察ではタッチの様子が見て取れた(部分写真5)。画面中央右のキャンバス角擦り傷からは、細い糸で織目の荒いキャンバスの様子や白色の下地塗料が観察できた(部分写真6)。



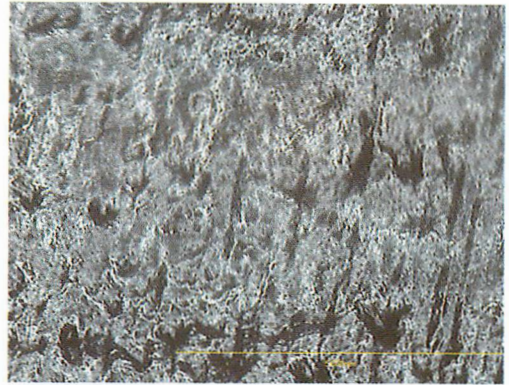
部分写真1 - ノート（100倍）



部分写真2 - 頬（160倍）



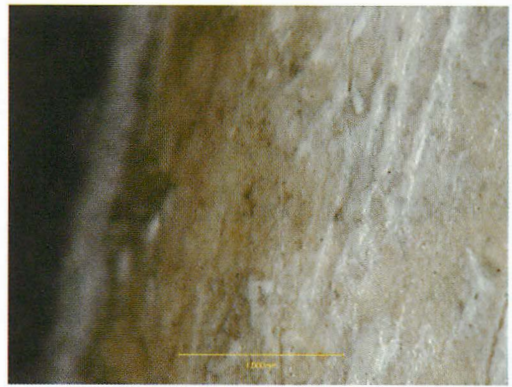
部分写真3 - 机（40倍）



部分写真4 - 机（40倍）



部分写真5 - 林檎（40倍）



部分写真6 - キャンバス角擦り傷（100倍）

■側光写真



■紫外線蛍光写真



■赤外線写真 (IR80)



【所見】

■側光写真からは、画面全体の亀裂が観察できた。特に机上のノート、少女の頬など絵具の厚塗り部分の軽い浮き上がりを伴う折り目状の亀裂が目立つ。

■紫外線蛍光写真では、左右の頬、唇、りんご、背景の花（赤い花のみ）部分で蛍光発光が確認できた。この部分でレーキ系絵具の赤色をグレース風に使用していることが分かる。鉛筆を持った手の原稿用紙および鉛筆のノート部分の暗くみえる部分は修復部分を示していると思われる。

■赤外線写真では、絵具層が厚塗りであるために下層部分の下素描などを判別することができなかった。

しかし少女の顔は右頬、頬、左頬の輪郭、鼻頭、唇の各部でやや白色が目立つが、モデリングは概して平坦である。上記の紫外線写真と比較すると、予め粗い明暗を配した下塗りを施し、仕上げ段階でレーキ系赤、各種オーカーなどを薄く重ねて微妙なトーンを作っているのがわかる。机の天板部分側面とその下の側板部分で通常撮影よりも明度の差がはっきりと分かっている。天板では白を加えた褐色で、側板では微量の黒または暗褐色を加えた褐色で下塗りをを行い、その上に薄く紫味を帯びた褐色を重ねたものだろう。紫外線写真はごく表層のみを写しですが、この2つの部分はほぼ

同じ明度であることから、最表層は同一色であると思われる。下塗りの色(白の含有量)の差によって、天板が手前に突起している様子が説明付けられている。机の下にある少女の脚部も下塗りはかなり明るく(白を多く含む)描かれ、仕上げ段階で黒、青、暗褐色を単独もしくは混合して薄く重ね、机下の暗さや机脚戸の距離感を作っている。

■携帯型蛍光X線装置による分析



測定箇所	検出元素	主な推定顔料名
1 ノート／白	Pb	鉛白
2 頬／桃色	Pb, Fe	鉛白、酸化鉄系褐色顔料
3 机／茶	Pb, Fe	鉛白、酸化鉄系褐色顔料
4 机／紫	Pb, Fe, Co	鉛白、酸化鉄系褐色顔料 コバルトブルー
5 りんご／黄	Pb	鉛白
6 裏面	Pb	鉛白

【所見】

調査部位ごとの所見を記す。部位に後記した数字は測定箇所のである(写真参照)。

地塗り (6) : カンバスの裏面に、織目の間から押し出された白色。鉛のみを検出した。鉛白を使用していると思われる。

ノート (1) : 白色のノート。鉛を検出した。主成分は鉛白と思われる。

頬 (2) : 明るいピンク系のグラデーション部分。鉛および鉄を検出した。ピンクの層はごく薄く、目視観察でも極めて明るい赤褐色(肌色)の下塗りが見えている。鉛はこの下塗り層の主成分である鉛白によるものと思われる。多量の鉛白使用で明るさを作っている。鉄も同様に下塗り層に含まれる酸化鉄系の赤褐色であろう。

机(横木下段) (3) : やや紫を帯びた濃褐色。鉛と鉄を検出した。鉛は鉛白、鉄は酸化鉄系の顔料に起因するものであろう。

机(天板側面) (4) : 紫を帯びた中明度の褐色。鉛、鉄、ごく微量のコバルトを検出した。鉛と鉄に関しては明度差はあるが色味が近い上記の机に準じ、鉛白と酸化鉄系顔料であろう。微量に検出されたコバルトについては後記の総合所見で触れる。

りんご (5) : 黄色が目立つ部分である。鉛のみを検出した。クロム酸鉛を主成分とするクロムイエロー、レモンイエローまたはその混合物が考えられる。

【総合的所見】

本作品は細めの糸を用い、心もち織目の粗い布地を支持体としている。使用した繊維は縦横ともに麻である。低倍率拡大での観察では縦横両繊維に木綿を思わせる繊維の混入がある。麻繊維の劣化がかなり進み、組織の破壊が始まっているので、木綿の混入は可能性に留め後日の再検証後に結論を出したい。

地塗りは携帯型蛍光 X 線装置による分析の試料 6 に記したように鉛白の単体である。この塗層が簡単に裏面に浸出していること、麻繊維の劣化が著しいことを考慮すると膠の目止めは[ない]もしくは[不十分]といえる。

絵具層の組成は上記の携帯型蛍光 X 線装置による分析の対象位置を中心に述べる。

ノート部分の見かけは白色であるが、この部分には目視観察でもわかる青味のある下塗りがある。鉛白層で完全に被われたために、表層のみに反応する蛍光 X 線ではこの青色層の組成は検知できていない。しかし、乾性油を含む鉛白層の経年変化で、顔料のケン化が進み見かけの透明度が上がったために、完成時よりは青味を感じるようになっているはずである。

顔(頬)の部分は、明るい肌色の上に赤色レーキ系の絵具でグレーズが使われている。グレーズ層が極めて薄く、かつレーキ系絵具の主要無機成分であるアルミニウムの原子量が小さいので、使用した分析装置では確認が出来ない。この部分の調査を担当した鈴嶋は、頬の部分が紫外線下でかすかな燐光発光することを確認している。レーキ顔料の有機発色色素に起因するものであろう。色素の同定は未了である。

机の側面は天板側面と、横板部分に類似した色が使われ、前者の方がより明色である。ともに紫を帯びた褐色である。色味に関与する成分としては鉄しか検出がなく、酸化鉄系顔料のみによると考える。色味を考慮しながら該当するものを推定すると、マルスバイオレットが最も可能性が高い。この色は色味が濃く白色を添加しないと意図する発色が難しい。鉛白は明度調整とともに発色目的で添加したものであろう。天板側部から微量のコバルトが確認されている。コバルト青の添加も考えられるが、デジタルマイクロスコープによる観察によると、机部分には無数の微小な表面亀裂が確認できる。この形状の亀裂は、コバルトもしくはマンガンを含む乾燥促進剤(シッカチーフ)を使用した時に生じやすい。鉄イオンは乾性油の乾燥を妨害するので、酸化鉄系顔料には乾燥促進剤を併用することが多い。この種の乾燥促進剤は表層にとどまる傾向がある。下段側板部分ではコバルトを検出していないが、携帯型蛍光 X 線装置による分析は X 線ビームを使用して微小スポットを調査するので、たまたま X 線ビームが目的顔料に当たらなかった場合も想定できる。コバルトについては後日に再検証を試みたい。

りんごの黄色部分は、頬と同様に薄い赤系のグレーズが目視できるが、上記と同じ理由で成分の確認はできていない。鉛のみを呈する黄色に対しては、有機黄色顔料と鉛白の混合も考えられるが、この作品がつくられた時期には、黄色有機顔料は一部の工業用塗料では試用が始まったが、絵具に使用したことはあまり考えられない。陰イオン側に含まれるクロムは微量で検出できなかった可能性がある。



北川民次 作 《タスコの山》（1934年）45.5×60.6 cm

【作品概要】

1932年、トラルパンからタスコに移住した北川民次は、野外美術学校を開校して、子どもたちの自由な発想による絵画制作を手助けするとともに、子どもたちの絵画から学んだプリミティブな画風による作品を制作した。

この作品は、タスコの村の入口にある特徴的な山を描いている。銀鉱山で賑わった坂道の村から見下ろせるスペクタクルな風景ではなく、独特の赤味を帯びた岩山にへばりつくように生える樹木に覆われた山を単純化して描き、また山麓に細く伸びる一本道を走る小さな自動車をおそらく想像で描き加えている。

タスコの子どもたちの絵画のなかに見出した、ただ目に見えるままに描く「視覚的な」写実ではなく、日常生活のなかで見慣れて知っているものを描く「認知的な」写実が、北川民次の芸術の基礎となった。

■ デジタルマイクロスコープによる観察



観察部分	
1	空と山の間
2	山（上部緑）
3	山（山肌）
4	山（下部緑）

【所見】

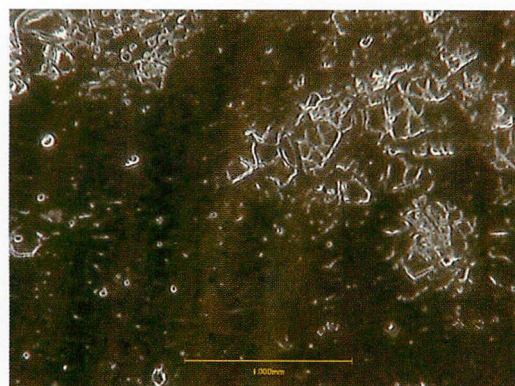
画面全体にワニス層が施してあり、その表面のT字型亀裂や局所的な縮緬皺の発生がみられる。(部分写真1,2,3,4)。空と山の間部分の観察では、筆毛の隙間、ごく薄塗りになった部分から下層の赤褐色がかすかに見える(部分写真1)。山の部分は随所に下層部分の絵具の様子や微小な気泡の存在が確認できる(部分写真2、3、4)。



部分写真1 -空と山の間 (40倍)



部分写真2 -山（上部緑）(100倍)



部分写真3 -山（山肌）(100倍)



部分写真4 -山（下部緑）(40倍)

■側光写真



■紫外線蛍光写真



■赤外線写真（IR80）

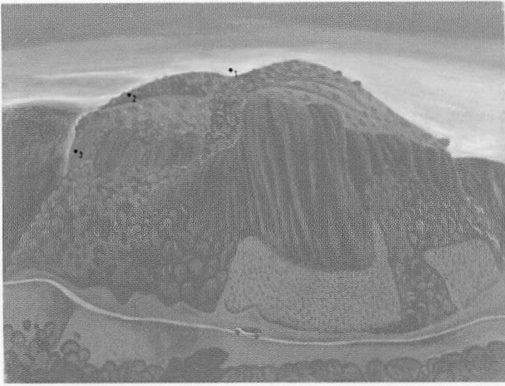


【所見】

■側光写真で下層面の微細な凹凸を強調して鮮明に捉えた結果、下層に女性像が描かれていることが発見された。作品には、小さな突傷と見られる部分以外に目立った絵具層の亀裂や浮き上がりは観察できなかった。

■紫外線蛍光写真では、次のようなことが判明した。山の稜線に沿った空の白色部分にやや黄色味を帯びた発光がある。同様のことは中央の山の向かって左側の明色部でも認められる。また画面下部を左右に貫く道路部分にもわずかながら類似の発光がある。この発光は鉛白特有のものである。道路にも鉛白の混入があるのがわかる。道路を走る自動車の胴体には白色が目立つが、紫外線写真では全く発光がない。また、画面全体に赤味のある微細な発光が砂をまいたように散っているが、原因は未解明である。なお、画面中央の赤褐色の山肌部分に、かすかな明色を伴う横線が何本かある。赤外線写真と比較すると、この線は下にある女性像の胸部と対応しており、下層の作品はこの部分に鉛白を使用している可能性が高い。

■赤外線写真では、画面中央の赤褐色の山肌部分の下層に描かれた女性像の胴体コスチューム部分や右手と思われる部分の観察ができた。画面中央左手の山肌部分にも女性の長い頭髮の一部と思われる輪郭線が見える。また右手の山肌には明るい円形が見えるが女性像との関係は把握できていない。そのほか下部の道路右端近くには何本かの短い斜線が矢羽根状に入っている。女性像の背景の一部だろう。



測定箇所	検出元素	主な推定顔料名
1 空(雲) ／白色	Zn, Ca	亜鉛華、カルシウム
2 山／緑色	Zn, Pb, Fe, Co, Cr	亜鉛華、鉛白、酸化鉄系褐色顔料、コバルトブルー、クロムグリーン
3 山／赤茶	Zn, Hg, Fe	亜鉛華、酸化鉄系褐色顔料、バーミリオン

【所見】

調査部位ごとの所見を記す。部位に後記した数字は測定箇所のである(写真参照)。

空(雲) (1)：白色。亜鉛、カルシウムを検出した。亜鉛は亜鉛華(二酸化亜鉛)であろう。

カルシウムは成分不詳である。

山(上部) (2)：濃い緑色。亜鉛、鉛、鉄、コバルト、クロムを検出した。亜鉛は亜鉛華、鉛は鉛白、鉄は酸化鉄系褐色顔料、コバルトはコバルト青、クロムは酸化クロムであろう。

山(下部) (3)：明るい褐色。亜鉛、水銀、鉄を検出した。亜鉛は亜鉛華、水銀はバーミリオン、鉄は酸化鉄系褐色であろう。

【総合的所見】

この作品は、女性の半身像の上に重ね描きしていることが、側光線による画面の観察で判明した。

支持体は木材を砕いていったん繊維化し接着剤を加えて圧縮再加工したファイバーボード(別名、ハードボード、ホモゲンホルツ)である。この材料固有の網目状の圧痕が画面裏側に露出している。表側は本来なら平滑面なのでヤスリがけなど粗面を作り加工があるかもしれないが、外観では確認できない。

地塗りの有無は現状では判別できない。存在したとしてもこの作品の下層に女性像があるので作品から試料採取を行って断面観察を行わない限り判定は困難である。

絵具層は携帯型蛍光 X 線装置による分析を行った部位を主に検討した。

空(雲)は心もち透明感のある白色である。携帯型蛍光 X 線装置による分析で亜鉛を確認しており主成分は亜鉛華である。この絵具はメーカーにより微量の白亜や鉛白を加えて商品特性を与えることがある。検出されたカルシウムはたぶん白亜添加によるものだろう。亜鉛華は鉛白よりは不透明であるが、白亜の添加量により透明感を加減できる。画家自身の手で顔料添加をして均質な色の変化を与えるのは工業化社会では相当困難である。雲を描いた筆毛の隙間から、あるいはごく薄塗りになった部分から下層(女性像)の赤褐色がかすかに見える。その結果、空は、心もち程度である

が、全体に赤褐色味を帯びている。

山（上部）はやや暗い濃緑色と白の混ざった緑色が部位により使い分けられている。明るさの差を無視すれば緑色の色味自体はほぼ同じで、ややくすみがある。無水酸化クロムである不透明色のオキサイドクロムと推定する。日本では使用頻度の少ない色であるが、北川のメキシコ滞在期の作品には今後注意すべき色であろう。クロムグリーンの可能性も否定はしきれない。しかし、クロムグリーンはクロムイエローとブルシアンブルーの混合物で、経年変化に伴い黄色が消え、青が黒ずむ傾向がある。この作品では、緑色は適度のバランスを保っており、クロムグリーン特有の黒ずみ現象を確認できない。オキサイドクロムとほぼ同じ組成で水の分子を付加した透明色のオキサイドクロム（別名ビリジアン）を、明色部に若干混じた可能性もあるが、併用した白の量が多く肉眼視で判別するのは困難である。

調査部分をデジタルマイクロスコープによる観察をすると、表面に微細な T 字型亀裂や局所的な縮緬皺の発生がみられる。コバルトの検出は顔料であるより、過量の乾燥促進剤の使用を考えたい。鉄の検出は酸化鉄系顔料によるものであるが、下層の女性像の一部であるか、女性像をいったん褐色系で薄く塗りつぶして山を描いたかは確かではない。この色は下の作品（または塗りつぶし）の色を有効に活用しているといえる。

山（下部）は赤味のある中明度の褐色で、植生のない土層露出部を描いている。鉄と水銀を検出していることから、レッドオーカー等の土性顔料に少量のパーミリオンを加えて調色し、亜鉛華で明度の調整を行っていると思われる。

全体の見かけでは顕著ではないが、デジタルマイクロスコープによる観察をすると、画面の随所に微細な T 字型の乾燥亀裂や縮緬皺があり、そこで生じる微妙な反射光が作品にひとつの魅力を生んでいる。

【参考文献】

- 久保貞次郎 編 『北川民次画集』（日動画廊・飯田画廊、1974 年）
『米寿記念 メキシコ時代の北川民次展』（飯田画廊、1981 年）
『北川民次メキシコ時代作品集 1923-1936』（さいとう画廊、1994 年）
『北川民次展』（愛知県美術館・笠間日動美術館、1996 年）
浅野 徹 監修 『北川民次画集』（日動出版、1997 年）
『油画を読む - 解剖された明治の名品たち』（東京藝術大学美術館協力会、2001 年）
歌田真介著 『油絵を解剖する - 修復から見た日本洋画史』（日本放送出版協会、2002 年）
『北川民次館蔵全作品目録』（かみや美術館、2003 年）

[北川民次の著作]

北川民次著『絵を描く子供たち - メキシコの思い出』(岩波書店、1952年)

北川民次著『子どもの絵と教育』(創元社、1953年)

北川民次著『メキシコの誘惑』(新潮社、1958年)

北川民次著『美術教育とユートピア』(創元社、1969年)

北川民次著『メキシコの青春』(光文社、1955年/エッフェー出版、1986年)

北川民次著『北川民次美術教育論集』上・下(創元社、1998年)